巻頭言

デンバーでの比較文化体験

― 誰の視点から？　どのような立場から？ ―

高濱 裕子

二〇〇九年の新年度早々、アメリカ合衆国コロラド州デンバーを訪問した。この訪問の目的は、四月二日から四日まで開催されたSRCD（Society for Research in Child Development）に出席し、私たちが進めている比較文化研究の成果の一端を発表することであった。

急激な社会・経済的変化の渦中にいる日本の親子の実情を知ろうとすれば、日本だけを見ていたのではわからない。「日本人はどのようにして日本人になっていくのだろうか？」この素朴な疑問を追究するため、私たちは日本、韓国そして中国の親を対象として、親の社会化方略の検討を始めた（社会化とはその社会の成員としての一定の社会的行動様式を習得していく過程をさし、そのための手立てを方略という）。対象とした子どもの年齢の幅は広く、三歳から小学校三年生

までであった。さらに、子ども同士の関係をとらえるために、幼稚園・保育所の保育者や小学校の教師にも評定を依頼した。このようなペア・データを収集する手法を採った理由は、社会化のプロセスを、家庭だけでなく就学前施設や小学校をも射程に入れて連続的に検討していこうと考えたからである。

親の社会化方略に関する分析結果の概要を紹介してみよう。東アジア三か国を比較すると、統計的に有意な文化差は認められるものの、「関係の維持」方略と「自己への関心」方略は通文化的に使われていた。つまり、親たちは子どもとの関係を重視しつつ、親の権威によって方向づけていくしつけ方略をよくつかうのである。三か国間では日本と韓国の結果がよく似ており、中国の結果は若干異なっていた。とりわけ、中国の親は子どもとの衝突を回避する方略をつかう頻度が高かった。また日本の親の評定平均値は総じて低いが、中国の親のそれは高い傾向にあった。

今回の分析に基づいて三か国の社会化方略の特徴を整理すると、次のようになる。日本の親は「関係の維持」を、韓国の親は「自己への関心」と「他者への配慮」を、中国の親は「関係の維持」と「自己への関心」を重視していた。私たちの仮説は、中国の結果の一部を除けば、おおむね支持されたことになる。社会・経済的変動による価値観の変化、少子化やひとりっ子政策の影響、学歴や教育への関心の高まりなど、アジアをも巻き込んだグローバルな社会変動の波を痛感し

た次第である。以上は第一段階の結果であって、さらに詳細な分析を進めるつもりである。

さて、第二の目的はデンバー美術館訪問であった。同美術館のネイティブ・インディアンの美術コレクションは、世界最大規模を誇り、合衆国とカナダすべての百五十部族から収集された約二万点が所蔵されている。プエブロ・インディアンのセラミック、ナヴァホ・インディアンの織物、ノースウェスト・インディアンのコースト彫刻（トーテムポールなど）、籠細工やビーズ細工、油絵などの多様な芸術的伝統に触れることができる。見学者の理解を助けるために、展示方法にも工夫が凝らされていた。ナヴァホの砂絵のように、子どもたちの興味や関心を喚起する参加型のコーナーも設けられていた。私が訪問したのは土曜日で、大勢の親子連れが楽しそうに取り組んでいた（第一土曜日は入場無料であった！）。

私は、インディアンの生活ぶりをイメージさせる日用品や衣服類、美術工芸品などを夢中になって見た。ベスト類に施された繊細でていねいな刺繍、日本の伝統模様を彷彿（ほうふつ）とさせる壺の幾何学模様、丹念に織り込まれたラグ類が醸し出す物語性など。インディアンの妻たちの有能さに焦点を当てたコーナーもあった。子どもをその中に寝かせ、背負って運ぶ革製のクレイドルボード（cradle board）は中央部が革ひもで編まれ、周囲には繊細な彩色が施されている。この道具のおかげで、子どもはいつでも親と一緒に移動することができた。彼らは子どもたち

に惜しみない愛情を注いでいたのであろう。私はほとんど直観的に、「生活を大事にし、家族を慈しみ、部族を愛する人たち」なのだと感じた。

突然、身内に不思議な感覚が湧き起こり、次の瞬間、それは電流のように駆け抜けた。そうだ、西部劇だ！　これまで私が抱いてきたインディアンのイメージは西部劇によって創られたものだ。かつてはジョン・ウェインやスティーブ・マックイーンが活躍し、俳優としてのクリント・イーストウッド（最近は監督業で有名）の出発点になった映画でもある。西部劇は白人側から描かれることが圧倒的に多く、それらの物語に登場するインディアンは、白人の生活へ侵入する者、安寧な世界を攻撃する者として描かれていた。頭に羽根飾りをつけ、自在に馬を操り、白人の金品や幼い子どもをも容赦なく奪い去っていく。美術館の所蔵品に触れて、私はインディアンの人々や彼らの生活について、自分が無知であったことを洞察したのである。

比較文化研究に参加する機会を得て、文化間の違いだけでなく、文化内の違いにも敏感になったことを自覚する。自分自身がある事象をいかなる立場からとらえているのか、どのような位置から自分の意見を述べているか、誰の視点から検討した調査結果なのか、そこに自分の価値観が反映されていないのかどうか。私たちはこれらを自覚的・意識的に省察する必要がある。デンバー滞在はそのことを改めて意識化させてくれた。（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科教授）